単元名：多文化共生と防災 高校生ができることを考えよう		
氏名：益田 由布子	学校名：兵庫県立舞子高等学校	
担当教科：地理歴史科・公民科	実践教科：公民科（公共）	
時間数：2時間	対象学年：1年生	人数：80人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

防災の取り組み例を参考に、多文化理解の必要性を理解する

異文化を持つ人たちと防災について取り組む方法を仲間と協力して考える

【2】単元の評価規準	（ア）知識・技能	多文化共生や防災について、南米の例を通して理解する
	（イ）思考・判断・表現	班員と協力しながら、ケーススタディを考える
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	グループワークに積極的に取り組んでいる 新聞記事や動画を視聴し、意見を述べる

【3】単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容

普通科1クラス40人と環境防災科1クラス40人で同時に授業を実施する。授業者がペルーへ訪問した際に本校卒業生と現地で面会する機会があり、彼女は卒業生として、防災の専門家として、海外居住者として、多角的視点から在校生に経験や知見を提供していただけると感じた。本学で防災を専門的に学ぶ環境防災科だけでなく普通科の生徒にも彼女の知見を共有することで、科を特定することなく全ての人にとって自分ごととして捉える機会としたい。

普通科生徒は、真面目に授業を受ける傾向が強い。多くの意見は出さないが、一人一人が考えて意見を持つ様子が見える。進学を考える生徒が多い。年3回の学校全体での防災訓練が防災を考える機会となる。

環境防災科生徒は、活力があり思ったことをそのまま意見として出すことが多い。一部生徒が授業に集中しない時があり、幼い面が見られる。1クラスしかないため、3年間を通じてクラス替えはない。そのため、いつも同じ仲間と授業を共にすることが多い。科単独の授業が多く、他のクラスの生徒と授業を受けることは稀である。卒業後は進学・就職と分かれる。学校全体だけでなく、校内や校外での防災活動に参加し、自ら動ける人になることを目指す。

今回、2科を混在させた班活動をすることで、それぞれの特性を活かした活動ができることを期待したい。

【4】展開計画（全2時間）

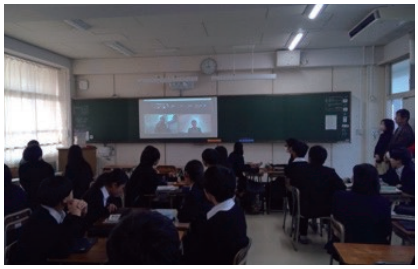
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	多文化共生と防災について、自分と関連する人が深く関わっていることを知る	ペルーで活動する卒業生の経験や知見に触れる 新聞記事を読み、本校卒業生の活動や考えを知る	神戸新聞記事 2023年9月24日「ペルーに伝える防災（上）」

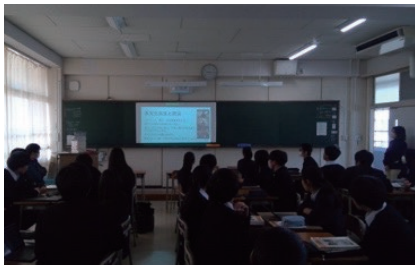
		卒業生の講演（学校Wi-Fiに不備がでないようにするため、事前に動画を作成）を見聞し、気づいたことや感想を事前に持つようにする ペルーの避難訓練の様子に触れ、国により文化や考え方が異なることを理解する	動画（卒業生と授業提案者の対談） PPT（卒業生作） PPT（授業者作）
2 本時	多文化共生と防災を組み合わせて、自分たちにできることを考える	2クラスを混在させて班活動をする 普通科と環境防災科でそれぞれの特性を活かしながら、考えを共有する 班で出た意見を、オンラインで繋いだ卒業生からコメントをもらう	ZOOM パドレット（意見共有アプリ） 紙・ペン（Wi-Fi不備の場合）

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	・前回授業振り返り　講師（卒業生）紹介 挨拶（講師および生徒同士）・動画振り返り ・パドレット:問1「講師の話の印象を色で表現せよ」	・4人1班とし、2名ずつ異なるクラス（科）が混ざるようにする ・別科の人と班を作るため、顔合わせの機会を設ける ・パドレットの使い方に慣れる	ZOOM プロジェクタ パドレット
展開 (35分)	・防災と多文化共生の要点 前回の授業の要点を確認	・生徒の発言を引き出せるとよい	パドレット（または紙とペン）
	・パドレット:問2「神戸には南米出身者が多く住む。来日して日が浅い彼ら、日本に関心がある彼ら、日本人との交流が少ない彼ら。ある日大きな地震が起きた。高校生4人（班）で彼らのためにできることは何か」を班で話し、パドレットに提出　提出時に出席番号を入れる	・グループ活動が行われているか確認する ・Wi-Fiが繋がらずタブレットが使用できない時は紙とペンを使用し、担当者がパドレットにあげるかZOOMチャットに入力する ・パドレットの投稿者を確認するために提出時に出席番号を入れる	
まとめ (5分)	・講師から意見への助言やコメント	・全ての意見にコメントする必要なし	
	・まとめとお礼	・授業後に振り返りの提出を促す	

【授業実践の様子】


実践者と講師が前回を振り返る


問2を示し、班で意見を出す

班の意見を2クラスで共有

【6】本時の振返り

生徒たちは積極的に取り組んだ様子だった。環境防災科は1クラスしかなく、普段は他クラスと合同の授業はない。普通科と共に考えることで、普段学んだことを活かす機会となった。また、普通科の生徒も防災に関する知識は特別持たないからこそ、先入観なく取り組むことができた。2クラス同時展開のため、他の教員にも協力いただいた。

生徒同士も班内でよく会話し意見をまとめて提出できた様子が見られた。生徒がパドレットで提出した内容を生徒が前に出て説明することで、講師の卒業生との交流の機会が生まれた。ただ一方的な講義ではなく双方向でやりとりすることが、オンラインならではの授業となった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

授業終了後の振り返りフォームに書かれた文言の一部は以下の通りである。（【8】4.⑤より）

・今回のお話を聞いて私にしかできないことがあるのかということを考えてみようと思いました。
・自分の大先輩が今海外を拠点に活動していてとてもかっこいいと感じた。自分の将来の道が広がりました。
・僕は今まで日本から外に出たことがなく海外の災害などが詳しくは知らなかったのですが今回の授業を終えて海外でも災害が起こっていることを改めて知ることが出来ました。また自分が今回の授業を通して印象に残っていることは、日本語がしゃべれない外国の方に対して地震が起こった際にどう行動するのかという問いが一番印象に残っています。一人ひとりが違う意見を持っていたのですがその中でも避難所では外国人スペースを作るという意見にとても共感することができとても印象に残っています。
・私は将来海外で防災を広める活動をしたいと思っているのですごくいい体験になりました。
・もしものシチュエーションで考えることで実際に災害が起きた時に役にたつような考えを生み出すことができました。
・僕には夢があり環境防災科に入ってきたけど多文化共生と防災という日本じゃなくていろいろな人やいろいろな文化なども自分の夢に関係すると思ったのでこれからは日本だけじゃなくもっと視野を広く多文化共生と防災を考えます。
・日本の中でしか災害について考えたことがなかったです。世界の震災について知れて見方が変わりました。

多文化共生については、以下のような意見が出た。（【8】4.①②より）

・新しい文化を知るための社会:新しい考え方や工夫を知ることができる（普通科）
・人と人を繋ぐ社会:お互いのことを理解することで心が通じ合えるから（環境防災科）
・国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとする:日本人と外国人の交流できる場を設けて、コミュニケーションの機会をつくることや、 国際交流協会に外国人通訳者・翻訳者を登録し、必要なときに外国人に紹介することが大切だと考えたからです。（環境防災科）
・互いの文化に興味が持てる社会（差別などマイナスな印象ではない）:国籍や文化が違うからと言って、お互いに差別しあったり、困っている国を放っておくだけでは、世界全体としても、日本だけで見てもより良い国にはならないと思うから、お互いについて理解しあったり、認め合うことが必要だと思った。（普通科）
・実現すべき社会:これが実現することによって新たな考え方や発見ができるからである（環境防災科）

・皆が自分らしくいられる社会:多くの文化と共に生きるということなので、その人らしさを受け入れることと同じだと思ったから。（環境防災科）
・違う国の人とも同じ場所で同じことをたのしくできる社会:いやいやするのではなく楽しく（環境防災科）

防災については、以下のような意見が出た。（【8】4.③④より）
・準備ができるもの:防災は防災学習をすると絶対に防げるものです。防災学習をすることで次の災害での被害を最小限にすることができます。私たち人間は命を落とすといきれません。災害はいつ起こるかわかりません。防災学習をしても絶対に助かるとは限らない。しかし、防災学習をして備えないと被害が大きくなってしまう。だから私にとって防災とは災害の「備え」だと思っている。（環境防災科）
・自分の命と大切な人の命を守り、未来へつなげるためのツール:命がないと、未来なんてないから。（環境防災科）
・生きるための備えや準備:備えや準備はしているから成功や失敗を防ぐことができるのでこのような理由でこの言葉を選びました。（普通科）
・災害から自分と自分にとって大切なものを守ること:自分はもちろん、自分にとって大切なものを守ったら、一緒に生きることができる確率が上がるから。（普通科）
・毎日気を付けることのひとつ:常に備えておかなくてはならない（普通科）
・誰かを助けるための手段:防災に関する知識がなければ、救えた命が救えなくなるだけでなく、自分の命が救えず、他人を救う機会も失ってしまうため。（環境防災科）
・十人十色:一人ひとりの住む場所、立地などでどういった災害や危険を防ぐか変わるものだから（環境防災科）
・経験:過去の震災から学び現在は耐震の対策ができ、経験を積んで技術を得ていると考えたから（環境防災科）

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

振り返りフォームに自分の思いや卒業生への感謝を述べる生徒が見られ、数年南米に滞在した卒業生と直接やりとりすることで1週間程度の研修でペルーを訪ねた授業実践者から話を聞くよりも、海外への関心を持つ機会となった。

普段と異なる科の生徒と話し合うことで、それぞれの科と交流する機会となった。それに伴い、今まで学んだことや経験したことを共有し、新たな視点を持つことができた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

（授業前）

外国そのものに関心があるが国外に出たことがないため、外国の文化や生活についての知識が十分でない。外国=英語の意識がある。南米については、ただ漠然と遠い国としての認識がある。

海外での災害の話を知る生徒もいれば知らない生徒もおり、多様である。

（授業後）

卒業生とオンラインでつなぎ、ペルーにある卒業生宅の窓の外を映すことで、日本時間午前9時・ペルー時間前日午後7時の時差を体験した。卒業生が現地で活躍する様子を知ることで、自分たちが今まで持っていた考え方を更新できた。自分たちが出した意見に卒業生から助言をもらえたことで、認めてもらえたことや自信につながる様子が見られた。

現地で生活した卒業生が写真を使用して問題解決に取り組んだ様子や現地の人々の暮らしや考え方を述べたこともあり、広く柔軟な視点を持って海外の現状を知る機会となった。一部の生徒は海外への関心を高める機会となった。卒業生の活躍を見て、自身の門戸を開く機会と捉えた生徒もいた。

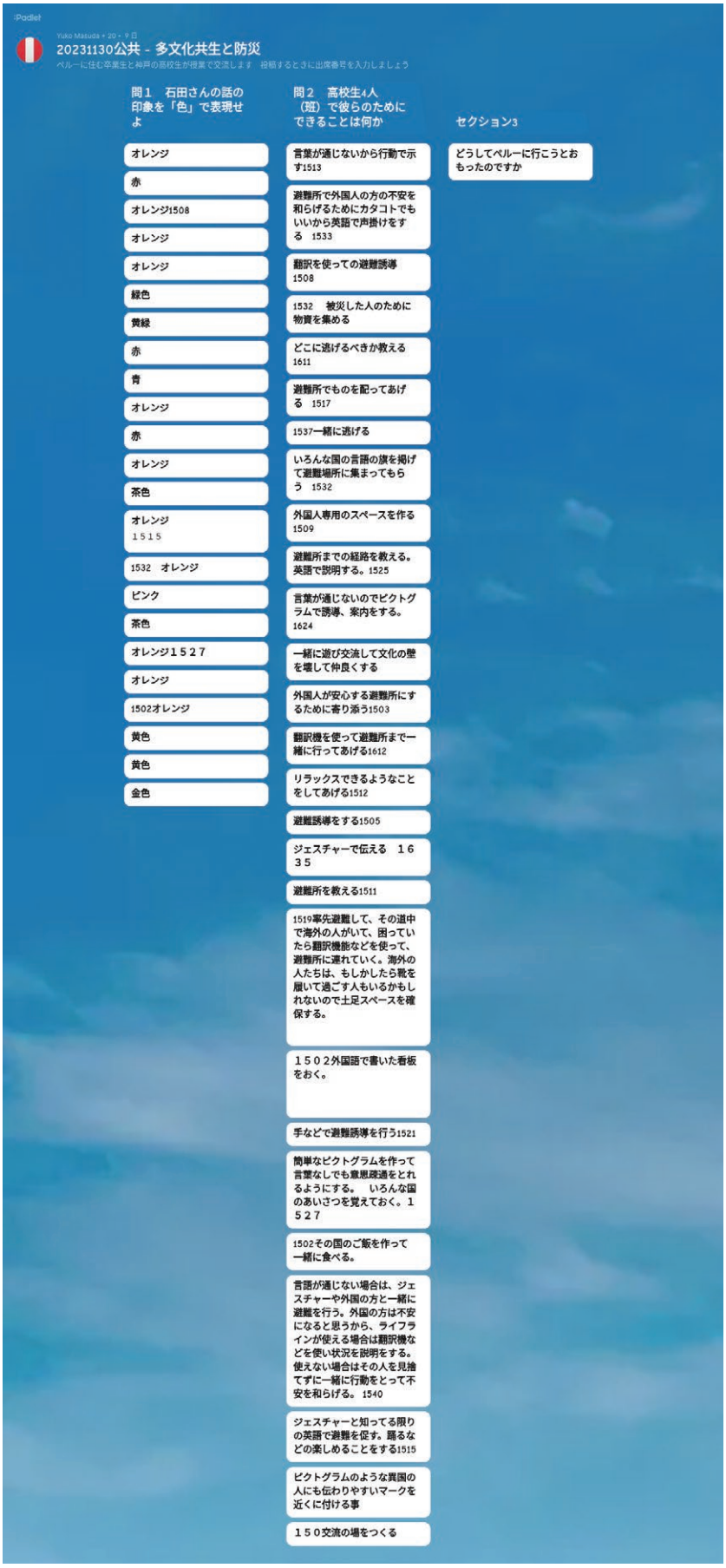
卒業生から、南米の人々は踊りを好み、日本語を学ぶときはひらがなから始めるとの話があった。南米の人々とコミュニケーションを取る方法を、彼らに合わせてとる必要性を認識できたであろう。

【8】自己評価

1. 苦労した点	授業時間が十分取れず、2回でまとめようとした。授業者自身が司会をしながらオンラインサポートにもいくらか関わったため、司会に専念できず、時に間を作ってしまった。 高1の公共の授業は授業者ともう一人の教員で担当するため、授業者が担当する2クラスのみで「多文化共生と防災」について多くの時間を割くことができず、時間をかけて生徒の知的関心を十分に深められないのではないかと感じた。また、公共の授業内容とこのテーマが完全に一致してないため、教科書の流れからいつこの授業をすべきかを考慮した。 ペルーから卒業生がオンラインで参加するため、かつ2クラス同時展開のため、卒業生の時差を含めた予定調整や時間割変更に時間を要した。
2. 改善点	Wi-Fiの環境を恐れて、最後の振り返りを授業中に実施できず、期日までに授業参加者全員の振り返りアンケートを回収できなかった。すぐにタブレットを起動しログインが円滑にできれば良いが、タブレットを忘れたりIDやPWがわからないなどいつまでもICT教育の壁が続いている。さまざまな授業で当たり前のようにタブレットを使う機会があれば、生徒はもっと早く使いこなせるだろう。
3. 成果が出た点	通常外部講師が授業へ参加するときは、講師が最も伝えたい内容を授業当日に直接生徒へ伝えていただく。しかし、Wi-Fi不備を鑑み、予めその内容を動画に収録して事前の授業で鑑賞、かつ再視聴希望者や欠席者のために動画URLをGoogleクラスルームで配信し、動画の内容を全員で確認する機会を設けた。 また、動画視聴から数日時間を置くことで、本時の授業前に動画内容を再確認し、1回目の授業内容を学びとして捉えている生徒が見てとれた。事前動画視聴を通じて1回のみオンラインで繋ぐより卒業生との距離感も縮まったように感じられた。 双方向で交流することで、海外への関心や生徒の将来に向けた意識を高めることができた。

4. 備考 （授業者による自由記述）	授業終了後1週間以内に振り返りフォームを提出（当日の時間内に作成・提出が理想だが、多数の生徒タブレットから同時にGoogleフォームにアクセスすることでWi-Fi不調によりZOOMが切断されることを恐れ、今回は授業時間外に作成時間を当てた） フォームの質問項目 ①あなたにとっての多文化共生とは《　　》（な）社会である 《　　》に入れる語句を入力しましょう ②　①で入れた語句の理由や補足を自由に書きましょう ③あなたにとって防災とは《　　》である 《　　》に入れる語句を入力しましょう ④　③で入れた語句の理由や補足を自由に書きましょう ⑤講師の石田さんへ一言

添付資料:


Padlet
Yuko Masuda • 20 • 9 日
20231130公共 - 多文化共生と防災
ペルーに住む卒業生と神戸の高校生が授業で交流します　投稿するときに出席番号を入力しましょう
問1　石田さんの話の印象を「色」で表現せよ
オレンジ
赤
オレンジ1508
オレンジ
オレンジ
緑色
黄緑
赤
青
オレンジ
赤
オレンジ
茶色
オレンジ
１５１５
1532　オレンジ
ピンク
茶色
オレンジ１５２７
オレンジ
1502オレンジ
黄色
黄色
金色
問2　高校生4人（班）で彼らのためにできることは何か
言葉が通じないから行動で示す1513
避難所で外国人の方の不安を和らげるためにカタコトでもいいから英語で声掛けをする　1533
翻訳を使っての避難誘導1508
1532　被災した人のために物資を集める
どこに逃げるべきか教える1611
避難所でものを配ってあげる　1517
1537一緒に逃げる
いろんな国の言語の旗を掲げて避難場所に集まってもらう　1532
外国人専用のスペースを作る1509
避難所までの経路を教える。英語で説明する。1525
言葉が通じないのでピクトグラムで誘導、案内をする。1624
一緒に遊び交流して文化の壁を壊して仲良くする
外国人が安心する避難所にするために寄り添う1503
翻訳機を使って避難所まで一緒に行ってあげる1612
リラックスできるようなことをしてあげる1512
避難誘導をする1505
ジェスチャーで伝える　１６３５
避難所を教える1511
1519率先避難して、その道中で海外の人がいて、困っていたら翻訳機能などを使って、避難所に連れていく。海外の人たちは、もしかしたら靴を履いて過ごす人もいるかもしれないので土足スペースを確保する。
１５０２外国語で書いた看板をおく。
手などで避難誘導を行う1521
簡単なピクトグラムを作って言葉なしでも意思疎通をとれるようにする。　いろんな国のあいさつを覚えておく。１５２７
1502その国のご飯を作って一緒に食べる。
言語が通じない場合は、ジェスチャーや外国の方と一緒に避難を行う。外国の方は不安になると思うから、ライフラインが使える場合は翻訳機などを使い状況を説明をする。使えない場合はその人を見捨てずに一緒に行動をとって不安を和らげる。1540
ジェスチャーと知ってる限りの英語で避難を促す。踊るなどの楽しめることをする1515
ピクトグラムのような異国の人にも伝わりやすいマークを近くに付ける事
１５０交流の場をつくる
セクション3
どうしてペルーに行こうとおもったのですか

添付資料:

授業で使用したスライド

振り返りシート

【多文化共生ってなんだろう？　振り返りシート】

◆「あなたにとっての、多文化共生の社会とは？」

＊下線部に言葉を入れてください。その下に、その理由や補足を自由に書いてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（な）社会

理由や補足など:

参考資料:

JICA九州「あなたにとっての、多文化共生の社会とは?」

https://www.jica.go.jp/Resource/kyushu/office/pr/ku57pq000005kf2t-att/multiculture_05.pdf